春の日

小川未明

青空文庫

もう、春です。仲のいい三人は、いっしょに遊んでいました。

徳ちゃんは、なかなかのひょうきんもので、両方の親指を口の中に入れ、二本のくすり指で、あかんべいをして、ひょっとこの面をしたり、はんにゃの似顔をして見せて、よく人を笑わせました。とし子さんは、おこりんぼでちょっとしたことでも、すぐにいぼをつってしまいます。そうすると武ちゃんと、徳ちゃんは、つまらなくなります。二人が、いろいろに機嫌をとっても、とし子さんは、笑いもしなければ、ものもいいません。

そんなときです、徳ちゃんは、いつもする得意の、指を口に入れて、あかんべいをして、とし子さんの顔をのぞきます。さすがに、いぼつりのとし子さんも、これを見ると、くすくすと笑い出して、じきに機嫌を直すのが例でありました。

武ちゃんには、徳ちゃんのように、そんなひょうきんのまねはできませんでしたから、もし、とし子さんと二人のときに、どうかして、とし子さんが、いぼをつれば、

「としこさんのばかやい。」といって、悪口をいうか、なぐりつけるのが関の山で、とし子さんも、

「だれが遊ぶもんか。」と、いって、泣きながら、帰ってしまいます。

しかし、三人は、いつとはなしに仲は直りますが、もし、徳ちゃんがいなかったら、そう容易に打ち解ける糸口が見つからなかったかもしれません。

ある日のことでした。三人は、いっしょに、お濠の方へ歩いてゆきました。雪が消えて、水がなみなみと、午後の日の光に輝いていました。土橋のところへは、よく、あめ屋や、おもちや店が出ています。

この日は、珍しく、紙芝居のおじいさんがきていました。

「紙芝居だね。」

「おもしろいな。」

そんなことをいい合って、おじいさんの方へ走ってゆきました。

＊　＊　＊　＊　＊

おじいさんは、五、六人の子供を前に集めて、お話をしていました。

――王さまは、戦争からお帰りなさると、その美しいお后をおもらいになりました。三国一の美人ですけれど、まだお笑いになったことがありません。どうしたら、愛するお后が笑ってくれるだろうか？　王さまは、山と宝物をお后の前に積まれました。けれど、やはりお笑いにはなりませんでした。

御殿のお庭に、鐘がつるされていました。

「この鐘を、なんになさるのでございますか。」と、お后が、王さまにお問いになりました。

「この鐘は、私が、忠勇の兵士をここへ呼び集めるときに、鳴らす鐘だ。これを鳴らせば、たちどころに、城下に住む三万の兵士たちは、ここへ集まってくるのじゃ。」

「どうか、この鐘を鳴らしてみせてはくださいませんか。」

「ばかなことをいうものでない。ほかの願いならなんなりときいてやるが、この鐘は大事があったときのほかは、鳴らされないのだ。」

「これほど、お願いしても、おききくださらなければ……。」

王さまは、愛するお后の機嫌を損じたと思し召されて、家来に命じて、鐘をお鳴らしになりました。

すると、「すわ、大事だ！」と、いって、三万の兵士は、取るものもとりあえず、軍の仕度をして、御殿のまわりに集まりました。

これをごらんになった、お后は、はじめて、からからとお笑いなさいました。

何事もなかったとわかると、兵士たちは、そのまま帰ってしまいました。

お后は、鐘を鳴らしただけで、あの先を争って集まった兵士たちのようすを、もう一度見たいと思われました。

「もう一度あの鐘を鳴らしてみせてください。」

王さまは、美しいお后の笑いをごらんになりたいばかしに、また鐘をお鳴らしなさいました。

鐘の音をきくと、兵士たちは、取るものもとりあえず、軍の装束に身を堅めて、前と同じように、御殿のまわりに集まってまいりました。これをごらんになったお后は、おもしろがって、からからと、ころげるばかりに、お笑いなさいました。

それから、幾月も間がなかったのであります。やぐらに登って見張りをしていた家来が、あわてて降りてきて、

「たいへんです、夷の軍勢が、押し寄せてまいりました。」と、王さまに、お告げしました。

王さまは、お驚きなされて、さっそく、鐘をお鳴らせになりました。しかし、二度も、だまされた人たちは、またかといって、だれもくるものがありませんでした。それがために王さまとお后は、ついに夷の軍勢のために、浮虜となってしまいました。――

おじいさんのお話は、終わりました。

＊　＊　＊　＊

三郎は、肩をならべて、お家の方へ帰りました。

「昔、支那にあった、ほんとうの話だってね。」と、武ちゃんが、いいました。

「ばかな、王さまだなあ。」と、徳ちゃんが、考え深そうに、いまの話を思い出しながらいいました。

「私、あんな后きらいよ。」と、とし子さんが、恥ずかしそうにしていいました。

あちらには、春の黄昏方の空が、うす紅く、美しい、夢のように見られたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　11」講談社
　1977（昭和52）年9月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店
　1936（昭和11）年12月
初出：「教育・国語教育」
　1936（昭和11）年3月
※表題は底本では、「春《はる》の日《ひ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年3月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春の日

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/